

平井尚志の なめとこ山通信



第64回

X年後の世界と私たち

皆さんこんにちは。緊急事態宣言はまた延長されてしまいました。どこに進めば出口が見えてくるのか、きっと誰もよくわかっていないのかもしれませんが。それでもオリンピックの準備は進んでいるようで、2ヶ月後の私たちは、どんな世界を見ているのでしょうか。皆さん、いかがお過ごしでしょうか。

さて、今回の「なめとこ山通信」は、未来の話です。未来の話なので、誰にもわからない空想上の話です。と言いますか、皆さんを煙に巻くようなホラ話です。未来のことなんて誰にもわからないのに、X年後はこうなっている！っていう人、いますよね。ホントかなあと思いつつ、お時間ありましたらお付き合いください。さんこんにちは。コロナウイルスのワクチン接種がいよいよ始まり、緊急事態宣言の終わりが見えてきて、世の中は少しずつでも変わっていくのでしょうか。もと通りの生活に戻る、と言うよりは、やはり新しい生活スタイルの新しい時代が始まるような感じもします。皆さん、いかがお過ごしでしょうか。

さて、今回の「なめとこ山通信」は、コロナの話題はあえて避けまして、最近ちょっと気になった、宇宙の話題で、お茶を濁してみようと思います。実は私は、子供時代にはアシモフ、クラーク、レイ・ブラッドベリらの小説を読み耽っていたSF少年でした。映画も、SF映画は好きですね。「宇宙にいるのは、われわれだけではない」って、何の映画のキャッチコピーだったか、おわかりですか？ お時間ありましたら、相変わらずの駄文にお付き合いください。

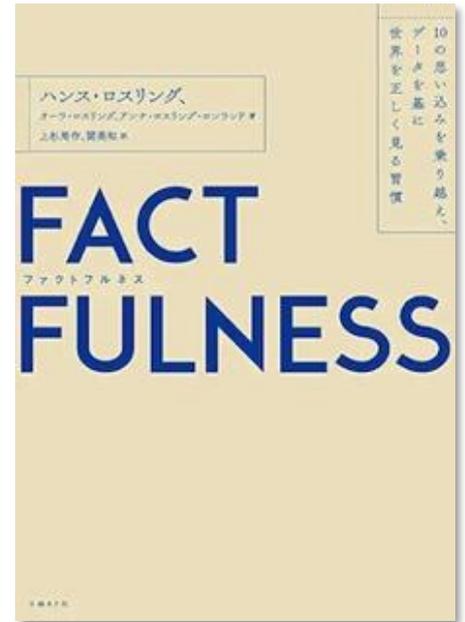
「2030年の世界はこうなる」的な書籍が、今盛んに出版されています。日本は世界のリーダーからとっくに落ちこぼれ、アメリカや中国の経済でさえも2030年を待たずに失速するだろうと予測する人がいます。その代わりに世界経済を牽引するのは、インドやブラジルだとも言われているのです。2010年を過ぎてから、国際経済を支える新興国として、ブラジル・ロシア・インド・中国・南アフリカの5カ国を指すBRICS（ブリックス）という言葉が使われるようになりました。それは今回のコロナ禍を世界が経験する前からです。そしてなんだか不気味に思うのは、今回のコロナ禍では、インドもブラジルもたいへん多くの死者を出していることです。それは、病院に行けない貧しい人達は切り捨てられたということでしょうか。そして、国の新興にとって有能な国民だけが生き残った10年後には、インドやブラジルが、アメリカや日本に取って代わるような先進国になっているのでしょうか。もちろんあくまで、未来のお話しです。どうなるかはわかりませんが、ロシアや中国も色々な意味で、これまで以上に世界へ（あるいは宇宙へ?!）進出していこうとすることは想像がつかます。コロナ後の世界経済は、10年20年先の世界を見通すことのできた国（あるいは指導者）が席卷していると言えるのではないのでしょうか。

ところで、「なめとこ山通信」でも何度か話題にしたSDGsに関して、最近よく耳にするようになりました。SDGsも、2030年をゴールと設定した、持続可能でより良い世界を目指した目標です。しかし気付くと、2030年までにはもうあと10年を切っていて、劇的に世界が変わるといようなことが本当にあるのだろうかという、悲観的な気持ちにもなってしまいます。ただ、SDGsの17の目標は、具体的な数値目標ではないので、ざっくり実現できるだろうと言えば言えなくもないところが、この目標設定の妙と言えるでしょう。例えば、目標1は「貧困をなくそう」、目標4は「質の高い教育をみんなに」です。さて

ここで問題です。

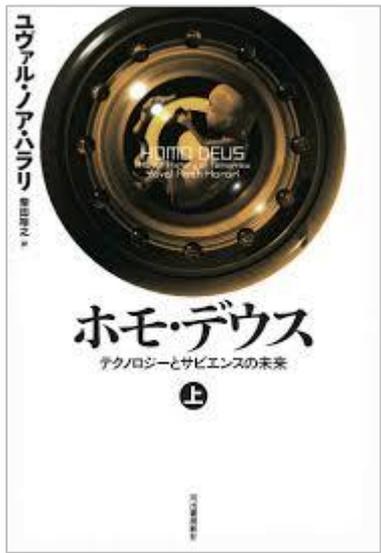
- 1、世界の人口のうち、極度の貧困にある人の割合は、過去 20 年でどう変わったでしょう？
A 約2倍になった。 B あまり変わっていない。 C 半分になった。
- 2、世界中の 30 歳男性は平均 10 年間の学校教育を受けています。同じ年の女性は、何年間学校教育を受けているでしょう？
A 9年 B 6年 C 3年

これらの問題は、『FACT FULNESS』（ハンス・ロスリング著 日経 BP 社）という本のイントロダクションの章に出てくるクイズから引用しました。答えは、1はC、2はAです。皆さん正解しましたか？ 私たちは往々にして、世界を悲観的に見過ぎていることがあるかもしれません。ハンス・ロスリングに言わせればそれは、「ドラマチックすぎる世界の見方」です。本当は、「時を重ねるごとに少しずつ、世界は良くなっている」というのも現実なのです。「何もかもが毎年改善するわけではないし、課題は山積みだ。だが、人類が大いなる進歩を遂げたのは間違いない。これが、『事実に基づく世界の見方』だ」と、ロスリングは言うのです。2030年までには、あともう10年ありません。それまでに私たち人類が、このコロナ禍を克服しているかどうか、まずそここのところもわかりません。（菅首相はよく、オリンピックを「人類がコロナに打ち勝った証として開催する」というようなことを言っていました。人類はもう既にコロナウイルスにけちょんけちょんにやられているのですから、打ち勝つものもありません。さすがにもう、言わなくなっていますよね。）ただ、2030年は、もうすぐ目の前です。きっと私たちは、2030年の世界を経験します。はたして私たちは、その時どんな暮らしをしているのだと思いますか？



さて次は、さらに 10 年後の 2040 年を展望してみましょう。2040 年の日本には、社会保障の 2040 年問題というのがあると言われています。2040 年の日本では、1.5 人の現役世代が 1 人の高齢世代を支えることになるという試算が出ています。ほぼ肩車のような状態です。2017 年から日本政府によって「人生 100 年時代構想会議」が開催されていることからわかるように、高齢世代はさらに高齢化するというのが、2040 年の現実です。人はどれくらいの年齢まで、元気で働いていられるでしょうか。もし、70 歳でも 80 歳でも、元気で働いていられるのであれば、2040 年問題もそれほど深刻なものにはならないわけです。しかし働くと言っても、その時代に私たちがする仕事とは、いったいどのようなものになっているのでしょうか。このコロナ禍があって、自分にとって仕事とはいったい何だろうかと考えた方は多いのではないのでしょうか。就いている仕事によって、明暗があったのも事実です。今までやって来たこととは違う内容・形態・方法で、仕事をせざるを得なかった場合も出てきました。そしてコロナ後も同様に、例えばリモートでとか時差通勤でとか、そういう新しい方法で仕事を続けている人がいるかもしれません。さらに、2045 年頃には、人工知能 (AI) が、技術的特異点 (シンギュラリティ) に達すると言われています。それは、2045 年問題とも言われています。(もっと早い時期だという人もいます。) シングュラリティとは、簡単に言うと、AI が人類に代わって文明の進歩の主役になる時点のことです。もちろん、「AI が人間を越える時なんて来ない」と言う人もいます。それはわかりません。ただ、人間に代わってコンピューターがやってしまう仕事が、どんどん増えているのは事実です。その時、人は、何をしていますでしょうか。何を、目指し

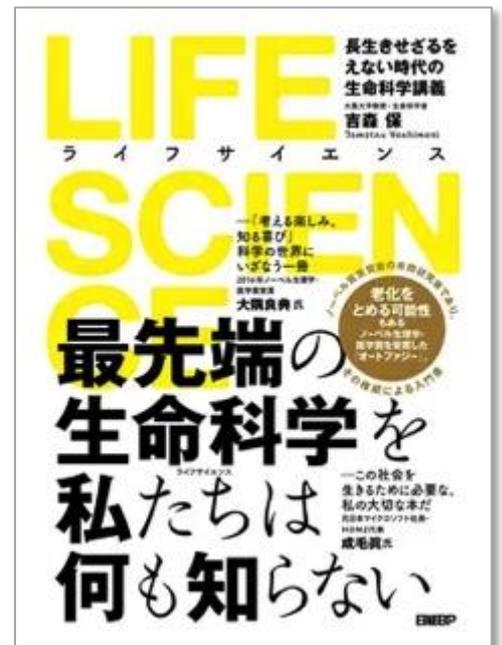
ているでしょうか。その時、人は、「神になろうとしている」と言うのが、ユヴァル・ノア・ハラリの主張です。ハラリの著書『ホモ・デウス』については、以前にも紹介したことがあると思います。AIが仕事をやってくれて、経済がそれで回っていくとしたら、人間は何を望むでしょうか。ハラリは、人類が飢餓や疫病



や戦争を克服したとしたら、人は更なる幸せ（快感の経験）を求めて、不老不死を追い求めることになるだろうと言います。すなわち、死なない神（デウス）になろうとするわけです。はたして、そんな未来がやって来るでしょうか。もし、誰も死なないとしたら、それは幸せな社会でしょうか。わかりません。わかりませんが、生物にとって死とはどういうものだろうか、死なないで生き続けることがはたしてできるだろうか、という研究が続けられていることは、どうやら確かなようなのです。

考えてみると、生まれてきたのに生物はどうして、死んでしまうのでしょうか。細胞単位で常に再生を繰り返しているのが生物だとしたら、100年でも200年でも、1000年でも何年でも、生きられるのではないのでしょうか。それを上手くやっているのが植物で、例えば3000年の樹齢になるとされる屋久杉なんかがありますよね。生物が死んでしまう原因の一つには、老化が挙げられます。一つ一つの細胞に不具合が起きてそれが蓄積

したり、癌化したりして、生物は年老いて死んでいくようになっていきます。その一つ一つを修正する医学は、格段に進歩していると言えます。人生100年時代になるなんて、ちょっとした驚きを持って私たちの年代の者はそのニュースを受けとめたと思います。それでも生物は、やがて死んでしまうのが定めなのですが、それはどうしてなのでしょう。生物には、自分の生を全うする（終わらせる）スイッチのような仕組みがあるのではないのか？ そのスイッチが入らないようにすれば、生物は永遠の生を手に入れられるのではないだろうか。どうなのでしょう。死なない生物がいるとしたら、その生物はどんどん増え続けてしまいます。あ、その生物が子孫を残すなら、ですけど。でも、生物は、子孫を残して世代交代をすることで、環境に適応して進化を遂げてきたわけですから、やっぱり、生きることと死ぬことは、セットになっているのでしょう。だからきっと、一つの個体はいつかは生を全うするようにプログラムされているのです。それでも、その時間を遅らせることはできるようなのです。吉森保の『LIFE SCIENCE』という本では、吉森氏の研究しているオートファジーという機能が紹介されています。オートファジーとは、簡単に言うと細胞を若返らせる機能です。オートファジーを活性化させれば、確実に寿命は延びるそうです。そしてその活性化には、赤ワインとチーズがいいそうです。それならこれから、赤ワインを飲んで長生きしようと、私たちはついつい、そう思ってしまうですね。



そうして長生きできたとして、2050年を迎えたとして、だいたい30年後のことです。「2050年問題」と検索すると、なんだか暗い話ばかり出てくるので、もうここでは書きません。自分も80歳を超えているから、本当にどうしているだろうかもわかりません。子供たちの未来が、少しでも生きやすい未来であってくださるようにと願うばかりです。あ、願うだけではいけませんね。子供たちの30年後が生活しやすい世界であるために、私たちが今から何かをしていかなくはいけません。そんなふうには思っています。2020年10月臨時国会の所信表明で菅総理は、「2050年までに温室効果ガスの排出を全体としてゼロに

する、すなわち 2050 年カーボンニュートラル、脱炭素社会の実現を目指す」と宣言しました。そのために、2030 年代半ばには、国内の新車販売から、純粋なガソリンエンジン乗用車はゼロになるとも言われています。いよいよそういう時代が来るのだなあという感じです。

コロナ禍の前、高等学校で、生徒にモバイル機器を配ってリモート授業が可能になるようにしようという動きがありました。しかし現場の教員としては、そんな夢のような話、無理に決まっているじゃんと思っていました。ところがコロナ禍があって実際にリモート授業の必要に迫られて、にわかになんかそういう動きは加速しました。学校によりまだ差はありますが、すべての都立高校の生徒には、マイクロソフト社の Teams というアプリが使えるようにアカウントが配られましたし、実際にリモート授業を始めている都立高校もあります。コロナ後の学校がどういう姿になるのかは、わかりません。元に戻ってしまうのか、始めたことはそのまま続けられて、生徒が学校に登校しなくなる日が来るのかどうなのか。東京にある大学では、昨年度一年中オンライン授業だったという大学もあるようです。学校とは何かということも、今、考え直されているのだと思います。

少し前のなめとこ山通信で、「コロナの時代を生きる」ということを書いたときに、自分自身も「アフターコロナを生きる新しい人間でありたい」と言って、「新しい時代はすぐそこに来ています」と結びました。今もそう思います。ただ、その新しい時代がどのようなものなのか、見えなくて、不安でいっぱいだったりもします。みんなそうなのだと思います。だから声を掛け合って、「大丈夫?」「大丈夫だよ。」「私はここ!」って、発信しましょう。みんな繋がり合っているんだっていう思いを、力にしましょう。繋がりを大切にして、未来を想像して、クヨクヨするのではなくてワクワクもしていきたい。そういう思いが、X 年後の自分にも、繋がっていますようにと、そう思っています。